日本大学歯学部紀要 38，39-43，2010

『鳥と獣と花』における糸杉と死の影
“Trees”の解題について

佐藤　治夫

Cypress trees and the shadow of death in *Birds, Beasts and Flowers*
—On the notes to Trees

Haruo Sato

Abstract

The enigmatic “notes” each located at the beginning of nine different title pages of *Birds, Beasts and Flowers* have never failed to puzzle the readers. These notes are substantially more difficult to understand and challenging than the poems themselves. The present author analyses the note put to “Trees”, with special attention to “the cypress trees” and finds that D.H. Lawrence’s view on life stems, not from orthodox Christian cultural tradition, but from pre-Christian pantheistic notion of the universe. He also finds at the same time that his apparent devotion to early Greek philosophers, especially to the fragmental works of Empedocles could be the very source of his unorthodox views on life.

Key words: *Birds, Beasts and Flowers*, cypress, D.H. Lawrence, poetry

糸杉の謎

D.H. ロレンス（1885-1930）の詩集『鳥と獣と花』2番目の“Trees”と題された詩文に寄せられた解題[1]は，興味深いが無関係とも見える二つの文で構成されている（*CP* 295）。

Trees

“IT IS SAID, a disease has attacked the cypress trees of Italy, and they are all dying. Now even the shadow of the lost secret is vanishing from earth.”

“Empedokles says trees were the first living creatures to grow up out of the earth, before the sun was spread out, and before day and night were distinguished; from the symmetry of their mixture, they contain the proportion of male and female; they grow, rising up owing to the heat which is in the earth, so that they are parts of the earth just as embryos are parts of the uterus. Fruits are excretions of the water and fire in plants.”

「聞くならく，イタリアの糸杉に病気が流行り，樹が死滅している由。今や失われた過去の秘密の影さえも，この世から消えつつあるのだ。」

日本大学歯学部　英語
〒101-8310　東京都千代田区神田駿河台1－8－13
Nihon University School of Dentistry
1-8-13 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8310, Japan
（受理：2010年9月30日）

「エムペドクレス曰く，太陽が大きく広がり，昼夜の区別が分明ならざりし頃，樹木は大地から最初に生えた生き物であると。ゆえに樹木の体内の構成は，雑然としており，男性と女性の要素を備えている。樹木は大地に蓄えられた熱により成長するのだから，胎児が子宮に属するごとく，樹木は大地の一部と考えられる。果実というのは，植物に内在する，水と火の要素から分泌されるものなのだ。」

（翻訳は筆者）

先頭に出てくるので目を引くのが「聞くならく（“IT IS SAID”）」のフレーズであろう。早くも1920年代から，イタリアを含むヨーロッパにおいて，糸杉を含む多くの樹木を枯らす菌類の存在は知られていた（Brasier 2）。ロレンスが，どのようなニュースソースから，この情報を手にしたのかは，今では調べる手がかりがないと思われるが，わざわざ，「聞くならく」と追加しているのは，ロレンスにとって，衝撃的なニュースだったのだろうか。

古代ヨーロッパ圏で，糸杉（西洋檜）は，その真直ぐに伸びる樹形から，正直（剛直）の象徴として敬意を払われて（“I was exalted like…a cypress tree on Mount Zion.”使徒行伝 24：17），神殿の神々の像に刻まれたり，虫が食いにくい性質から，建材・船材として重宝され，木部は虫除けの効果があることから腐敗を防ぐとして死者の埋葬時の下準備に使われたこともあり，宗教儀礼にまでも用いられ，最終的には葬儀のシンボルとして糸杉を考える文化的習慣が，ヨーロッパ，イスラム文化圏に広まった（Graniti 92-93）ものである。それゆえに，ロレンスの生きた戦間期には，「絶望，哀悼，死」という糸杉の花言葉が，現実味を帯びて感じられていたはずである。

エトルリアに消えた死の糸杉

1923年に初版が出版された『鳥と獣と花』に比べると，ずっと後となる1927年に *Etruscan Places* を執筆するはずのロレンスが，新婚時代に訪れて魅了された，古代エトルリア（現在トスカーナ地方）では，防風の目的であちこちに糸杉が植えられ，それが墳墓の周囲にまで及んでいて，トスカーナ地方の風景に，アクセントを与えていたはずである。不思議なことに，トスカーナ地方で多くの糸杉のある風景を見たはずのロレンスが描く *Etruscan Places* には，糸杉という言葉は一度も登場せず，松“pine trees”や，椰子の木しか登場しない。

ロレンスの作品中でも，作品の舞台となる場所に生えているのが自然と考えられる作品，例えば『見よ！私たちは切り抜けた』におさめられた詩「死者の日」に出てくる，墓場に向かう会葬者が歩くところの糸杉の道（“avenue of cypresses”）以外に糸杉は滅多に出現しない。墓場には，先に述べたように糸杉が実際に植えられていることが多いので，シンボリックな意味で描かれているというよりは，写実的描写と受け止められるので，特別な意味や意義をロレンスが付与していると解釈することは難しい。

糸杉が多く登場するのは，『アアロンの杖』で8回（“cypress”“cypresses”）だが，そのいずれも風景描写の一部と考えうる用法で，直接的に糸杉と死を結び付けているものではない。作品でロレンスが結び付けるのは，糸杉と「暗い（薄黒い）“dark”」というイメージにすぎない。ロレンスは，『イタリアの薄明』においても，糸杉を登場させているが，暗闇を照らす役目を与えられた糸杉（細長く伸びた蠟燭のような姿）というイメージで，「死」を予感させる糸杉というものではない。つまりロレンス作品には，奇妙にも糸杉が死とは直接結びつかない傾向があると言えるであろう。ロレ

ンスが表現する糸杉には，「暗い色をした（“dark”）」が付くのみであり，「死を促す」「死と対面する」のようなイメージも無い。

「糸杉」における糸杉

詩作品の中で，最も多く糸杉が出てくるのは，現在論じている『鳥と獣と花』の“Trees”に含まれる五編の詩の先頭に位置する「糸杉“Cypresses”」の 15 回（“cypress”“cypresses”を含む）である。

「糸杉」は，トスカーナの糸杉に対する呼びかけから始まる。作品中でその糸杉は“Tuscan cypress”から“Etruscan cypresses”へと，呼び方が入れ替わるように変化する（というより故意に混乱して見せて，実はトスカーナという固有名詞が，語源からして古代エトルリアにつながることを暗示しているのではないだろうか。

詩は，「トスカーナの糸杉，それは何だ？」から始まる。糸杉は黙ったまま，秘密めいた様子で立ち，その様子はあたかも，失われた言語，民族つまり，ローマに滅ぼされたエトルリアを暗示していると，ロレンスは描く。

ここでは，糸杉を，ローマ人からの一方的な見解で，邪悪であるとされたエトルリア人の邪悪さを体現し，緩やかに揺れる炎（先述の蠟燭のイメージとここで重なる）であり，

……

Monumental to a dead, dead race
Embalmed in you!

……

「汝，糸杉に埋め込まれた，完全に完全に死に絶えた民族の思い出」
（*CP* 297）

として規定し，後に残ったのは糸杉と墓のみの，暗い偏執狂と断じる。

ロレンスはさらに，エトルリア人の微笑み（多分遺物としての壁画を見てのことであろうが）は，エトルリアの墳墓にも，エトルリアの糸杉にも痕跡を残しているとし，更にイメージを膨らませ，エトルリア人は，民族としての実存的存在感を，

……

Which they have taken away
And wrapt inviolable in soft cypress-trees,
Etruscan cypresses.

……

（*CP* 298）

自らの死と共にこの世から持ち去り，穏やかな糸杉の中に，封じ込めたとして，糸杉そのものを，エトルリアの精神の残滓と断じる。このように解釈してゆくと，「糸杉」の中で，糸杉がエトルリアの墳墓と同義で使用されていると言えるだろう。

糸杉が表象するもの

このように考察すると，冒頭の解題らしからぬ解題の後半につながる。ロレンスが何度も読み返

した，バーネットの「初期ギリシア哲学」からの，完全な引用である。原文の該当箇所は，まだ先に続く[2]が，ロレンスが引用をこの箇所までで止めたのは，その後に続く文が，樹木の内部に蓄える水分の量により，落葉樹，常緑樹の区分，それと樹木が生えている土地の成分（“particles”）を吸い上げる状況により，葡萄などの味わいが異なるという，きわめて説明的なものであり，結果として解題が長くなり過ぎるからであろう。

ロレンスが解題を書くにあたり必要としていた，樹木の性質は，太古からの存在，男女の両性（火と水）を内包，大地の胎児としての存在というところであろう。つまり，樹木が地面から生えた原初の生物であるから，後から生まれた生物よりも，中身が雑然として，男女の性質が未分化で，水と火の要素も内在しているとしている。

ロレンスが，自分で書いた先頭の短い文章とエムペドクレスの引用をすることで，読者による理解を目指したのは，この解題全体と，解題に続く詩，特に「糸杉」とロレンスとの関係だと考えると，理解がしやすくなるのではないか。

糸杉の解題についての論理の（詩心のとも言える）進み方は，

1）糸杉が（ロレンスの生きていた 1920 年代で）死滅する事例が増加
2）糸杉はエトルリア人の生き様と関連していた
3）樹木そのものは，人類の出現前の世界の象徴であった
4）ローマ人に滅ぼされたエトルリア人は，暗い冥界を彷徨っていた
5）冥界を象徴した糸杉が死滅することは，エトルリア人と文化が，今度こそ完全に消滅することになる

という，きわめて秩序だったものになっている。

む す び

『鳥と獣と花』の解題のテーマ（この場合は，糸杉）と次の詩の内容が密接に結びつくのは，この二番目の“Trees”においてだけ[3]である。「糸杉」においてロレンスが，エトルリア文化とエトルリア人の消滅に，哀悼の意をあらわしていて，この奇抜な解題と「糸杉」の詩が，統一された共生関係を示していることは，ロレンスのエトルリアへの憧憬と哀惜の情を示すものと考えられる。

注

1　*Birds, Beasts and Flowers* 構成表

果物：柘榴，桃，無花果，花梨とナナカマドの実，葡萄，革命家，日の沈む国，平和
樹木：糸杉，無花果の木，巴旦杏，熱帯地方，南国の夜
花：巴旦杏の花，紫のアネモネ，シシリアのヒヤシンス，ハイビスカスとサルビアの花
福音書の獣たち：マタイ伝，マルコ伝，ルカ伝，ヨハネ伝
生き物たち：蚊，魚，蝙蝠，ヒトと蝙蝠
爬虫類の生物たち：蛇，亀の子供，亀の甲羅，亀のファミリーコネクション，雄亀と雌亀，亀の愛技，亀の叫び
鳥たち：雄七面鳥，ハチドリ，ニューメキシコの鷲，青カケス
動物たち：驢馬，雄山羊，雌山羊，象，カンガルー，犬のビブルス，クーガー，赤い狼
精霊：ニューメキシコの男，タオスの秋，西に呼ばれる精霊，アメリカン・イーグル

2　原文では，この後に“[…plants.], and those which have a deficiency of moisture shed their leaves when that is evaporated by the summer heat, while those which have nore moisture remain evergreen, as in the case of laurel, the olive, and the palm ; the differences in taste are due to variations in the particles contained in the earth and to the plants drawing different particles from it, as in the casxe of vines, for it is not the difference on the vines that makes wine good, but that of the soil which nourishes them.”という文が続いている。

3　三番目の“Flowers”では，確かにアーモンド（巴旦杏）が出てくるが，それは“almond bone”への言及のためであり，巴旦杏そのものへの関係はあまり見られない。

Bibliography

Lawrence, D.H. *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. New York : Viking, 1971. (Referred to as *CP*)

Brasier, Clive *Phytophthora Pathogens of Trees : Their Rising Profile in Europe*. Information Note : October 1999 Forestry Commission, United Kingdom pp.1-6

Burnet, John *Early Greek Philosophy* 3rd ed. London, A&C Black Ltd. 1920

Burwell, R.M. “A checklist of Lawrence’s reading.” In : Sagar, Keith ed. *A D.H. Lawrence Handbook* pp.59-125, Barnes and Noble Books, New York, 1982

Graniti, Antonio *CYPRESS CANKER : A Pandemic in Progress*. Annual Review of Phythopathology, 1998. 36 : 91-114

Simonetta de Filippis (Ed.) *Sketches of Etruscan Places and other Italian Essays* (1932), Cambridge University Press, 1992. (cited as *Etruscan Places*.)